

東南アジア（タイ、マレーシア）の農耕土壌から分離された子のう菌 *Triangularia striatispora* (核菌綱タマキビ目ソルダリア科) を新種として記載、報告する。*Triangularia* の子のう胞子は2細胞からなり、上部の細胞は暗色、通常三角または五角形、下部の細胞は無色、成熟時は空胞化し縮少することが多い。これまでの既知種はすべて子のう胞子表面が滑らかで、本種のように縦に隆起の認められる例は知られていない。

□N.F. Hughes: **Palaeobiology of Angiosperm origins.** Problems of Mesozoic seed-plant evolution. vii+242 pp. Cambridge University Press, Cambridge, etc. 1976. 本書は被子植物の起原と中生代種子植物の分類について最近の古生物学的研究成果と研究途上で生じた諸問題を克服してゆくための方法について具体例をあげながら著者の見解を述べたもので、1. 研究の現状、2. 白亜紀の地史、3. 化石物件寸評（ジュラ紀裸子植物、前白亜紀裸子植物、被子植物的性質を具えた前白亜紀の化石、後白亜紀被子植物）、4. 化石物件からの推論（被子植物の起原と初期の進化についての見解）、5. その他の見解（白亜紀以前の被子植物について、比較形態学研究の寄与、その他最近の諸説）、6. 結句（被子植物の分類、要約と展望）、全17章と用語集、文献、索引からなる。現生植物による分類学研究のアプローチの著しい多様化に加えて、化石物件の断片性のために“化石上の証拠は系統の考察から除外する” (Davis & Heywood, 1966. Principles of Angiosperm Taxonomy) といった見解も指導的研究者によって公けにされてきている最近の研究動向の中で、化石材料それ自体の研究上の制約を十分認知したうえで、被子植物の分類、進化史研究にはたす化石研究の意義を改めて追究した結果書かれているだけに、従来の古植物学書にありがちな発見済化石の記述と解釈に終わることなく地質学、古生物学の研究成果に裏打された各地質時代ごとの地球環境、フロラ（時にはファウナも含む）の記述とこのような古生態の把握の重要性、parataxa の扱い方とその連合法、古植物に適用される現行国際命名規約の問題点、記載技術の向上と白亜紀以前の大形化石の再記載の必要性、花粉による集団解析の意義等について論議が展開されている。従来植物学的古生物学では現生種との関連が薄くほぼ化石種だけを問題とすればよい三疊紀以前、ならびに現生種と共時的な新第三紀以降の化石研究がその主流を占めてきたため、一般に共時的 (synchronic) 観念の認識が欠如していたと思われる。しかし本書で扱った地質時代と植物についてはそうした思考上の吟味を回避できぬ必然性もあったであろうが著者はこうした考え方の必要性を化石 *Ginkgo* の扱い方など具体例をあげながら随所で強調している。本書では提出された諸問題が残念ながらよく整理され体系化されているとは言い難いこと、特に大形化石に関してはその特徴の記述に欠けるきらいのあることなど問題もあるが、その高度な内容と共に化石種子植物の分類に関する文献をほぼ網羅していて最近の古植物学研究の動向を知るうえでも十分に参考になると思う。

(大場秀章)